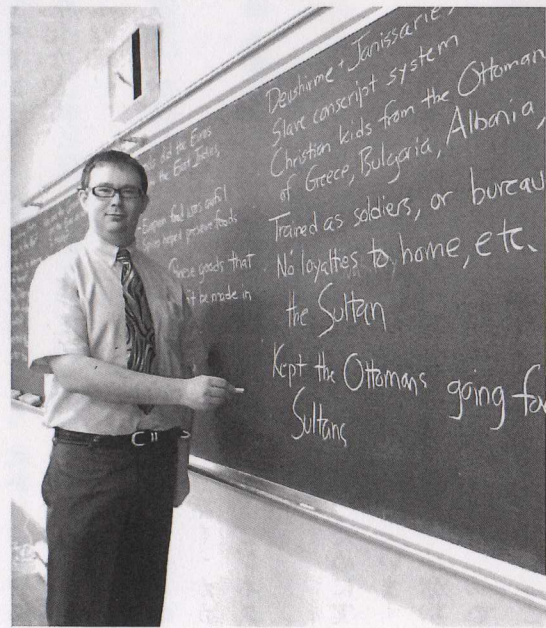


### 第三章 「真の国際人」とは





## 地球の中の日本

この半世紀のあいだ、地球はどんどん小さくなっていきました。

航空機などの移動手段の発達に加え、テレビや電話をはじめとする通信技術の進歩、そしてインターネットの普及による地球規模の情報の共有化なども、物理的、精神的な距離をどんどん縮めていき、同時に、人々は国境を越えて活動や営みの範囲を広げていきました。

学園にはよく、入学や編入を希望するご父兄の方々が見学に足を運ばれます。先日は、息子さんの編入先として学園の小学校に興味を持っていただいたというご家族が見えました。お話をうかがうと、現在お住まいはカナダのバンクーバーにあり、お父様はカナダと日本を行き来するビジネスマンで、お母様は東京の八丁堀でカルチャースクールを経営なさっているといいます。

そんなふう身近な生活空間が地球規模におよんでいるというお話に接すると、留学のために実に三十一日をかけて海を渡った五十年前とのあいだの遠い時間の隔たりに思いを馳せてしまいます。私は、この世代の人間としては比較的、若いころから、日本の外の空気によく触れてきた方かもしれません。そもそもキリスト教という、もともとは西洋で生まれた価値観や考え方の中で育ってきましたし、二十代のうちにヨーロッパ諸国や北米などを訪れ、そこで単なる旅行者では触れるこ

とのできない、外国の人々の考え方や人間性と向き合う機会を与えられました。

洋行の船のレストランでは、まわりからじろじろと物めずらしげな視線を向けられ、自分はいったん日本を出れば白人でも黒人でもない、小柄で肌の黄色い、小さな島国の人種であるという思いを、料理の味の代わりにかみしめました。

留学先のフリブル大学では、早々にアメリカ人と議論も交わしました。

「おまえたち日本人は、真珠湾を不意打ちしたよな。」

「あんたたちこそ、原子爆弾を落として、たくさんの人たちの命をうばっただろう。」

などと、かなりお互いに熱くなってやり合っても、彼らは翌日には

「おはよう、ドミニク（私の洗礼名）。元気かい？」

と肩をたたいてきます。日本人どうしなら、しばらくお互いに感情が尾を引きそうなものですが、アメリカ人はさっぱりしたものだ、世界にはいろいろな人々がいると感心したものでした。

## 「真の国際人」とは何か

今日、教育をめぐるいろいろな場所で、「国際化教育」がテーマとして掲げられています。

「国際人」という言葉は決して新しいものではありませんが、何をもって国際人とするのか、国際



人であることの要件は何か、真の国際人とは何か、つまり「国際人」というものの定義は、「国際人」という言葉を口にする人の数だけあるようです。

### 語学を身につけたユダヤ人

「国際人」という言葉を聞いて、私が真っ先に連想するのはユダヤ人です。

ユダヤ人はたった二千万人しかいない民族ですが、その何倍もいるアラブ人との戦争に勝ちました。アメリカを牛耳っているのはユダヤ人であるという人や、ユダヤ人たちがやがて世界侵略を果たすと警鐘を鳴らす本もあります。ノーベル賞受賞者の約三十パーセントはユダヤ人だそうです。著名な政治家やマスコミで活躍する人物も多く、かのウォルト・ディズニーもユダヤ人です。

ユダヤ人が歴史的にも、また今日にあっても秀でた存在である理由はいろいろといわれていますが、私は彼らの教育に対する考え方にこそ秘密があると思います。

ユダヤ人は二千年のあいだ、自分たちの国を持たなかった民族です。自分たちの国がないということは、銘々が自分で生きていかなければならないということです。国の助けを借りずに生きていくという哲学を持った彼らは、そのために必要な力を自分たちの子孫に与えていくには教育を行うことが必要だと考えたのでしよう。

どれだけ莫大な財産や土地を持っていても、立派な家があっても、高い地位についても、ある日、「あなた方はそこから出ていきなさい」といわれたら、それでおしまいです。そのときに持っているのは自分の命と、そして受けた教育だけです。命を取られない限り、受けた教育を剥奪されることはありません。

私のまわりでも、よく、遺産相続のつもりで子どもに教育費をかけているという話を聞きます。特に医学部を志望するお子さんを持つご父兄から、

「土地を売って、子どもを学校に入れました。ちよつと早い遺産相続のようなものですよ。」という話を聞くことがあります。これは、一つの考え方として間違っていないのです。

自分の国を持たないユダヤ人たちは、地球上のどこでも生きていけるように、まず語学を身につけました。

隣国が攻め込んできたり、政変が起こったりして、それまで生活していた土地を追われる事態が不意に訪れた場合、どこへ行っても生活ができるように、彼らは語学の勉強を三歳から始めます。

ユダヤ人の知識人はたいいてい英語、フランス語、ドイツ語の三か国語を自在にあやつります。最近では、これに中国語が加わっているでしょう。



## 語学力があれば国際人か？

いまや語学力、さしあたり英会話のある程度のスキルは、ビジネスの世界ではあたりまえのように求められる時代になりました。

ビジネスマンたちは会社が終わったあとで英会話の学校に通ったり、英検やTOEICの試験を受けるために一生懸命勉強しているようです。いつか新聞を見ていたら、最近は「モチベーション」「ライアンス」「コンプライアンス」などと、カタカナのビジネス用語がやたら使われるようになってきたという記事を見かけましたが、これもグローバル化の時代が新たな局面を迎えていることを示しているのでしょうか。

ところで、外国語を流暢に使うことができれば国際人なのでしょうか。言語はあくまでコミュニケーションの道具であって、それを操る者の人間性こそが問題であるはずです。

たとえば、世界のいろいろな国々から日本を訪れた人たちが、あなたのところにやって来て、雑談をはじめとします。実は彼らは全員、日本語が堪能で、会話はすべて日本語で行われるとしましょう。

みんなはまず、あなたに日本の歴史や文化のことをたずねてくるでしょう。でも、あなたはきちんと胸をはって説明できるでしょうか。徳川幕府のこと、川端康成のこと、富士山のことについて、外国からやって来た彼らの好奇心を満たすだけの話をする事ができるでしょうか。

また、次に話題が近代哲学に移ったとして、あなたは、サルトルやら実存主義やらの話題に加わり、耳を傾けたり、自分の意見を述べたりすることができるとでしょうか。

それができない場合、やりとりが英語なら「英会話はちょっと…」という言い訳ができるかもしれません。しかし日本語であつては、まるで立場がありません。

会話が英語であつて、あなたがバリバリの英語の使い手であつたとしても、徳川幕府のことや実存主義について何も知識や考えを持っていなければ、ただただ目の前で繰り広げられる熱い議論の傍観者でいるしかありません。

さらに、仮にあなたが流暢に英語を操り、しかも教養も十分に備えた人物だとしても、誰かが口をはさもうとするのを手でさえぎって、いつまでも話を続けたり、自分の意見に対して反対意見が唱えられると、それ以後は腕を組んでそっぽを向いたりしたりしてしまうのでしょうか。

また、もしあなたが、世界中から集まった面々を前に、もっぱら白人の方を向いて話したり、肌の色が濃い人たちの話にはまったく耳を貸さないような人物であつたりしたら、外国からやって来た彼らに「また日本にきたときには、ぜひ彼とまた話をしたいなあ」という気持ちを喚起すること



ができるでしょうか。

人を受け入れる広い心、差別しないまっすぐな心を持ち、人間としての存在を感じさせる人物こそが国際人としてのベースになるのではないのでしょうか。そして教養と知性があり、ゆとりのある心を持って、外国人を魅了できる人にならなければ、本当のコミュニケーションもできないのだと思います。

### 道徳教育にも熱心だったユダヤ人

私は留学時代に、また九段の暁星学園の校長時代には特にフランス人を中心として、諸外国の人々と接触し、面会をし、また交渉をする機会がありました。そこではよく彼らが、心の広い、人を差別しない人物のことを

「ボン・デイクト！」

「グッド・タイプ！」

つまり、「あの人はいい人だ、信用できる、面白い人だ。」と称えるのを耳にしました。

多少昔の人物になってしまいますが、以前総理大臣をつとめた大平正芳さんは、諸外国の人々から評価の高かった人物です。失礼ですが、見かけはそれほどシャープな印象を与える人ではありま

せんし、スピーチの際には「あああ、ううう」といううなり声ばかりが印象に残るような人でした。しかし、日本を訪れ、彼と面会をする機会があった人は、彼のことを

「オー、ミスター・オオヒラ！ グッド・マン！」

と賞賛していたといえます。みんな、彼は心が広い人物だということです。

さきほどお話ししたユダヤ人も、語学ばかりではなく、教養や道徳に関する教育を厚くしていました。彼らは子どもが三歳のときに語学教育を始めるのと同時に、ユダヤ教の旧約聖書や、ユダヤ人が編纂した「タルムード」と呼ばれる聖典を子どもたちに勉強させたのです。「タルムード」は、生活の中で発生するありとあらゆる問題の解決の方法や、人間の生活の基本などをユダヤの学者たちが編纂したもので、十万ページにもおよぶ書物です。それをラビという指導的な立場の人間が教えたり、あるいは家庭で父親が子どもたちに教えました。たとえ内容が理解できなくとも、徹底的にたたき込みました。そんなふうにして、早くから子どもたちの中に道徳観念や哲学を身につかせていったのです。

現在、私たちの学校には、下は幼稚園から上は高等学校まで、合わせて約二十人の外国人の先生が教壇に立っています。彼らは子どもたちからすれば、もつとも身近な外国人であり、私も彼らには「真の国際人」とは何かを身をもって示す人物であってほしいと願っています。外国人講師の中



には、短い人の場合は一、二年で本国へ帰ってしまう人もいるため、新しく来てもらう人との面接も頻繁に行います。そこでの判断の基準は、礼儀正しく、立ち居振る舞いや言葉遣いがしっかりしていて、服装は清潔であるか。また士気があり、語学力のほか教養や知識を豊富に備えているか、などです。

人間が最初に出会ったとき、やはり相手のルックスというものに目がいきがちです。しかし、ここで私が着目するのは顔のつくりや体つきではなく、たとえば礼儀作法や、言葉遣いや、立ち居振る舞いです。それがしっかりできていれば、着ているものは清潔であればいいのです。

そしてもう一つ、人物の内面については、心がいかに豊かで広くて高尚であるかということです。つまり、それが私の考える「真の国際人」であり、暁星国際学園ではそうした人物の育成を大きな目的の一つとしています。

### 帰国子女という存在

いま、いろいろな中学や高校、あるいは大学の受験案内を見ていると、「帰国子女」という文字をずいぶん目にするようになりました。

帰国子女というのは、ご存じのように、両親の仕事などの事情で海外で暮らし、日本に帰ってき

た子どもたちのことです。入学試験にあたっては、通常の学力試験ではなく、本人の書いた志望書を検討するAO入試（アドミSSIONズ・オフィス入試）と呼ばれる方式や、適正試験などによって可否を判断しています。

一口に帰国子女といっても、いろいろな子どもがいます。

親の赴任先が外国の大きな都市であれば、現地に日本人学校が設けられていますから、そこで国内の学校とほぼ同じ内容の教育を受けることができます。帰国後に日本の学校に編入させても、比較的すんなりなじむことができますでしょう。

日本人学校がないために、インターナショナルスクールと呼ばれる学校へ通う子どももいます。これはその名のとおり、日本人だけではなく、現地へやって来て生活しているあらゆる国の家庭の子どもたちが通う多国籍な学校で、多くの場合、授業は全面的に英語で行われます。

たとえば、中学一年のときにアメリカに渡り、その後、中学三年になって帰国した子どもは、現地で日本人学校に通っていたとしても、インターナショナルスクールに通っていたとしても、日常会話を含む英語の力を相当つけているでしょうし、もちろん日本語の読み書きやコミュニケーションも自然に行うことができるでしょう。日本の中学校に編入しても、すんなりなじめるかもしれません。



しかし、二歳のときにアメリカに移り、十二歳までインターナショナルスクールに通った子どもの場合はどうでしょうか。現地で、親が家庭で意識的に日本語の訓練をしたり、日本人サークルに参加させたりしていても、それでも顔形は日本人そのものでありながら思考は英語という子どもにもなっているかもしれません。

そうした子どもを、帰国後に一般の学校に編入させることには大きな無理や困難が伴います。まず日本語による授業についていくことができないし、また周囲の友人たちと自然にコミュニケーションをとることもできないでしょう。

言葉の問題だけではありません。生活習慣や嗜好の違いというものを、子どもたちも敏感に感じ取るものです。まわりは物めずらしさもあって、微妙な部分をあげつらい、からかったりすることもあるでしょう。英語の時間に教科書をネイティブそのものの発音で読んで、ひやかされ、以後、萎縮してしまったりするなど、本人してみれば理不尽な、つらい思いをすることもあるでしょう。かつて、留学を終えて帰国し、新米教師として意気揚々と教壇に立った私にも、そんなギャップにとまどうシーンが訪れました。

私が留学していたスイスでは日頃から、教師と学生がフランクに声をかけ合い、授業もうち解けたなごやかな雰囲気のもとで行われていました。しかし、長崎の学校には「三步下がって師の影を踏まず」という考え方が残っていて、教師はあくまで威厳を持って教壇に立ち、生徒たちに対して毅然とした態度でのぞむことがよしとされていたのです。ところが私は、授業中にはそれなりの威厳を発揮しましたが、休み時間などは生徒たちにどんどん声をかけて、なごやかにやりとりをしていました。それが「人気取りをしている」として、同僚の教師たちの攻撃的となってしまうのです。一度そうなると、「坊主にくけりや袈裟まで」ではありませんが（もとより私は坊主ではなく神父ですが）私の物のいい方や一挙手一投足が鼻につくようで、いちいち揶揄の対象とされ、私はすっかり「洋行帰りのキザ」というレッテルを貼られてしまいました。

大人であれば、信念を持って自己を貫いたり、柔軟にそりを合わせたりして、やりすごすこともできますが、子どもの場合、おしつぶされたり、自分を見失ったりしてしまうこともあるでしょう。そのため帰国子女に対しては、彼らが受けた教育や生活の背景を配慮した、きめ細かな受け入れ体制が必要となるのです。

### 「帰国子女」のための学校

私が東京・九段の暁星学園中学・高校の校長をつとめていた一九六〇年代は、日本が高度経済成長の波ののって国際的な競争力をつけていった時代です。当時、国内の商社や銀行などが意欲的に



海外への進出をはかるようになり、単身赴任ではなく家族ぐるみで海外に赴任する日本人が増えていきました。

当時の文部省（現在の文部科学省）の統計によると、一九六六年（昭和四十一年）の段階で海外で暮らす幼稚園から高校までの子どもは約四千人でしたが、一九七六年（昭和五十一年）には小学校・中学校の義務教育年齢の子どもだけで約一万八千人、一九八六年（昭和六十一年）には約四万一千人と激増しています。

これに合わせて、帰国子女の人数も増えていきました。一九七一年（昭和四十六年）には小学校から高校までの年齢の子どもが約千五百人でしたが、一九七六年（昭和五十一年）には約五千人、一九八六年（昭和六十一年）には一万人を上回っていました。

当時、暁星学園は、国内にフランス人のための学校をつくりたいというフランス大使館の意向に協力して学園の敷地の一部を貸し出すなど、フランス政府と親しい関係にありました。また、当時、暁星学園では小学校からフランス語を教えていて、またキリスト教を背景としていることもあり、一般の学校に比べてそうした帰国子女を受け入れる用意が整っていました。

そのため、暁星学園はフランスをはじめ、スイスやベルギーなどから帰ってきた子どもたちを広く受け入れていたのですが、やがてフランス語圏以外からの帰国子女の受け入れを希望する声が高

まっていたいきました。

中には、せっかく現地での生活で身につけた外国語の能力を国内でおとろえさせてしまうのは残念なので、引き続き外国語が身近な環境で子どもに教育を受けさせたいと希望する家庭もありましたが、そうした希望をかなえる学校は当時、皆無でした。

また、子どもが高校生になっている場合、赴任先に一緒に連れていくのではなく、日本に残して日本人としての教育をしっかり受けさせたいという要望を持つ家庭もあるようでした。日本の大学を受験するのであれば、日本で受験勉強をする方が有利だということもあります。

そんな状況を見ていて、やがて私の中では「帰国子女の受け入れを目的とする全寮制の学校」新設の構想が輪郭を持ちはじめました。

## 五十歳の冒険

新たな学校建設の構想は、時間がたつうちに私の中でどんどん具体的になっていきました。

私は帰国子女の受け入れを目的とする一方で、帰国子女というものが生まれる状況、つまり日本人が活動の舞台を世界に移していく国際化の時代をにらんで、的確に国際教育を行うことがこれからの時代、間違いなく求められるはずだと考えました。



また、当時、すでに国際化という言葉はあちこちで使われていましたが、実際に国際教育を行っている学校はあるのだろうかという疑問も持っていました。一方、当時、すでに世の中は中学・高校というところに対して「受験」という大命題をつきつけていましたから、それを度外視して「国際化教育」の看板を掲げることが、はたして世の中の関心を集めることになるのか、そして、学校を経営するマリア会の理解を得ることができるといふことに頭を悩ませました。

私は、かつて誓願を立てる際に聖書に手を置き、遠い異国の地にやって来た宣教師たちのことを思い、私も非凡に生き、教育に一生を捧げることが決心した日のことを思い出しました。

私は、冒険的に生きることを神と約束したのでした。暁星学園は、裕福でしっかりした家庭の子どもが多く、そのため職員室で教師が子どもの素行のことで頭を抱え込んでしまう事態もそうそうありません。また、理事会の席で学校経営をめぐる危機的な数字を前に一同が暗澹たる面持ちになるといふこともない学校です。その意味では、小・中・高校の校長、また暁星学園の理事長としておだやかにすごしていく道も、まわりから見れば、あったのかもしれませんが。

しかし、思い切ったことをして非凡に生きるのが自分にとつての選択肢であると確信した私には、困難や苦勞が目に見えている方向以外に選ぶ道はありませんでした。

### 資金という壁

前の章で、長崎の海星学園での教師時代、子どもたちに海パンを買い与えた際に、一人の子どもに「理想は形にしなければいけない。そのためにはお金がいる。」と論ずることになったときのことをお話ししました。

私はまさに、そうした事態を迎えることになりました。結局、新学校建設の件は暁星学園の理事会で正式に了承されましたが、私は暁星学園に負担や迷惑をかけることのないよう、自分で資金を調達する道を選んだのです。

しかし、なにしろ「学校をつくる」のです。私は当初、百万円の寄付を百人の方にお願ひすれば一億円になるから、それでやれるのではないかと計算しましたが、とんでもありませんでした。最終的には十億円ぐらひは必要になることがわかったのです。

私は暁星学園のOBや父兄の方々にお願ひして新学校の設置委員会や募金委員会をつくり(三〇〇〜三〇一ページ参照)、あちこちにお願ひをしました。「校長がやるなら、ご協力しましょう。」と、多くの方々が快く引き受けてくださり、人どうしの信頼関係というものの大切さが身にしみる思いがしました。



委員の方々にあちこちに声をかけていただきましたが、必ず一度は私自身が直接うかがって趣旨をお話しし、頭を下げてお願いをしました。

銀行や企業などにもお願いをしましたが、日本には社会的に意義のある活動に対する「寄付」というものが習慣として根付いていませんので、反応は決して芳しいものではありませんでした。

また、寄付のお願いと合わせて、当時の文部省にも補助金の交渉に通いました。

当時は文部省の内部でも帰国子女の対策に関心が寄せられていた時期で、すでに一九六五年（昭和四十年）に東京学芸大学附属中学校に帰国子女教育学級が設立されたほか、一九六七年（昭和四十二年）には公立・私立の学校の中への帰国子女教育研究協力校の指定が開始されていました。

そして一九七五年（昭和五十年）には文部省と外務省が中心となって、「海外子女教育推進の基本政策に関する研究協議会」が設置され、帰国子女を受け入れて適応教育を行うことを目的とする私立学校の設置に対して、一九七七年（昭和五十二年）以降、助成措置がとられることが決まったのです。

しかし、私たちは勇み足で文部省の門をたたき、以来、幾度にもわたって計画の説明を行いました。が、事態は思うように進みませんでした。「こんな資金計画では実現は不可能」であるというのが、彼らの判断なのです。それでも根気よく通い詰め、「あなたがた、それは無理ですよ。」と顔に

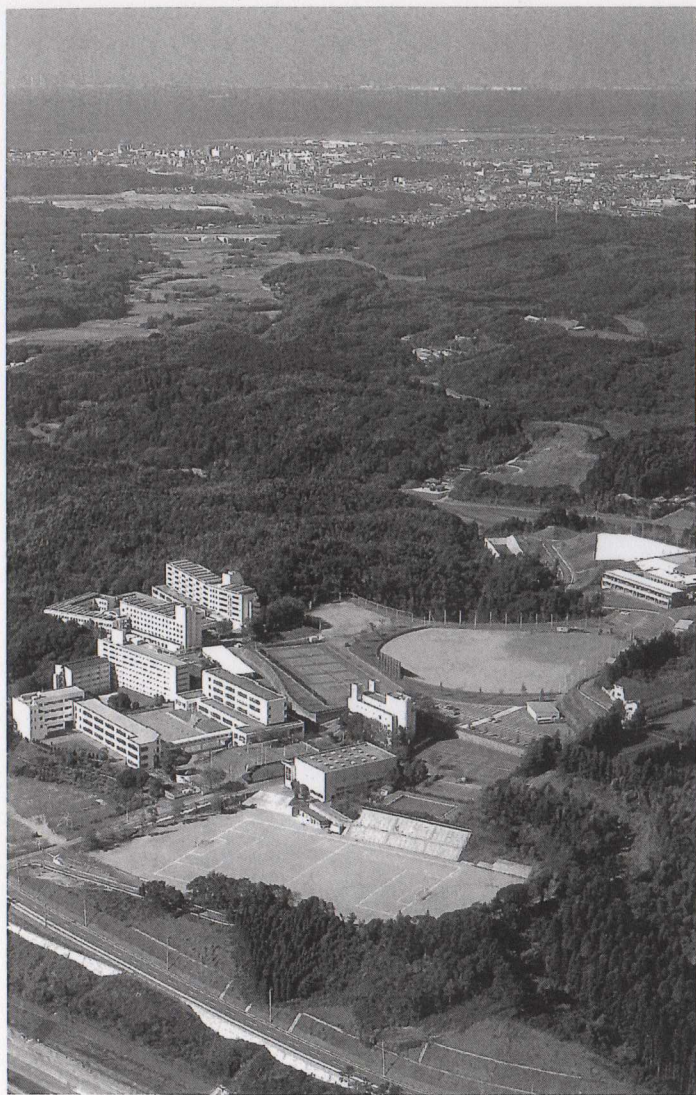
書いてある役人たちが前に計画の説明を繰り返しました。一度はついにしびれを切らして、「もう、いい！」と席を立つたことがありましたが、結局二年近くを費やして、ねばり強く交渉を重ねた結果、四億八千万円の補助金がおりにになりました。これに寄付金の十億円を加え、さらに十億円を借入れることで、資金の目処がたつことになったのです。

### 木更津の山の中に

いま、東京方面から暁星国際学園に向かう方法の一つに、東京駅前からバスに乗るとい方法があります。東京駅の八重洲口近くの停留所からバスに乗ると、バスはすぐに首都高速道路に入り、やがて東京湾アクアラインを通って木更津市に入ります。東京駅前を出て、ちょうど一時間ほどで「暁星国際学園前」の停留所に到着し、そこから舗装された道を十五分ほど歩くと校門です。このほか東京方面からは、京葉道路や東関東自動車道から館山道に入り、木更津北の出口で降りれば十分ほど学園に到着します。

学園はゆるやかな傾斜ののどかな山間にあります。近くには「かずさアカデミアパーク」という、国の試験機関や研究機関のほか、製薬や化学、コンピューターなどのメーカーの研究所が集まった研究都市の近代的な建物が並んでおり、その中心部ではホテルオークラが営業しています。





2004年（平成16年）撮影。私たちの学園が、傾斜のゆるやかな山の中にある様子が、わかります。遠くに見えているのは東京湾です。

現在でこそ、こうした都市としての整備の進行を肌で感じることでできるロケーションですが、三十数年前に学校建設候補地としてこの地を訪れた際には、ここはまだ自然におおいつくされた未開の地でした。いまでこそ舗装された道が校門までつづき、土が露出した路面をまったく踏むことなく学園にたどり着くことができますが、当時は、キツネやらタヌキやらがたわらを駆け抜けていく農道をゴム長をはいて敷地に向かうような状態だったのです。

もともとここは、新日鐵が持っていた土地の一部でした。戦後、新日鐵は牧畜や不動産経営などの多角化経営をいらい、房総半島一帯のあちこちを買収していました。国際都市の建設も計画に入っていたようです。私たちは彼らの所有していた三万坪の山を選び、買い上げて、土地を開いて建設用地としました。

### 暁星国際学園、設立

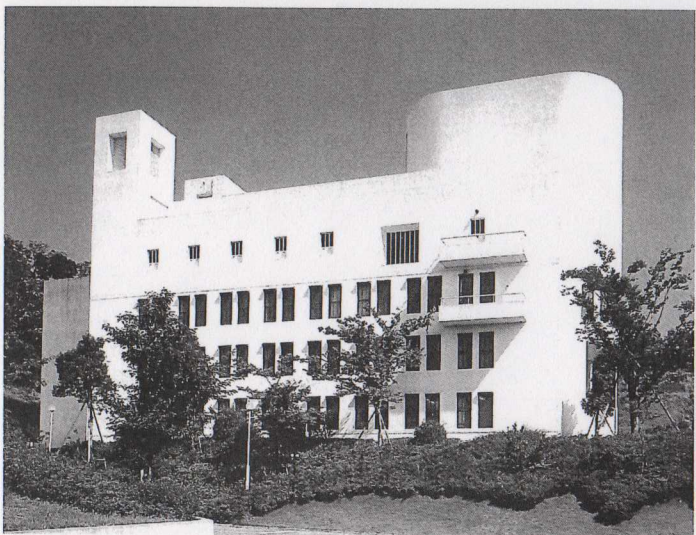
学校をつくるには、あまりに不便なところではないか、という声もよく聞きましたが、全寮制の学校なのだから、生徒たちは月に一度ぐらいしか家に帰らないし、そのときは親が送迎をすることも多いだろう、だからかまわないのだと答えていました。

一九七七年（昭和五十二年）、千葉県知事により、木更津市に高等学校を新設する計画が承認さ





中・高第二校舎（手前）と、第一校舎



事務室のほか、御聖堂などが入っている管理棟。私財を所有しない私は、この建物の3階の一部屋に起居しています。

れました。翌年に高校校舎、聖ヨゼフ寮、管理棟の工事が始まり、一九七九年（昭和五十四年）一月に生徒募集を開始しました。募集は四月入学の高校一年生の男子のみで、帰国子女四十名と一般生徒四十名の合計八十名を定員としました。入学試験としては、帰国子女については書類選考と面接に加えて作文（日本語、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語のいずれか）、また一般の生徒については国語、数学、外国語（英語またはフランス語）を実施しました。

一九七九年（昭和五十四年）四月、暁星国際学園は全寮制の男子高校として開校しました。当時、帰国子女の受け入れを目的とした高校としては私たちの学校のほか、ほぼ時期を同じくして前年の一九七八年（昭和五十三年）に、東京・三鷹に開校した国際基督教大学高等学校、また関西ではこのあとに開校する同志社大学高等学校ぐらいいでした。

開校後、暁星国際学園では、早い時期から日本人の帰国子女や残留子女のほかに海外からの留学生も受け入れられました。中国や台湾からの留学生のほか、ベトナム難民が在籍していた時期もあります。アジアに限らず、世界各国からの留学生が存在しているというのは、国際教育を行ううえで理想的な環境といえるのではないかと考えたのです。



## 一貫教育体制の整備

暁星国際学園はまず男子高校としてスタートし、その二年後の一九八一年（昭和五十六年）には中学校を開校しています。また、一九九五年（平成七年）には高校と中学それぞれに女子部を設け、同時に共学の小学校を併設し、一貫教育を行うための体制を整えていきました。

幼稚園は千葉県君津市の暁星君津幼稚園に加え、二〇〇四年（平成十六年）には千葉県浦安市に暁星国際学園新浦安幼稚園を設立しています。

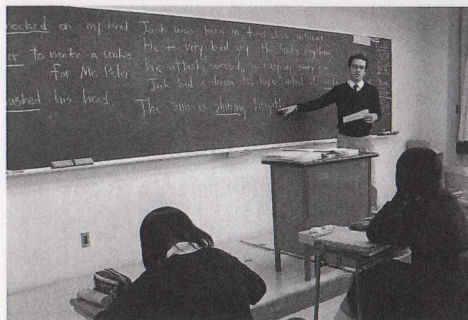
## 伸びる子どもは、どんどん伸ばす

現在は中学・高校のいずれも男女共学としています。また全寮制ではなく、通学を認める形をとって、中学・高校ともに約四割が通学生です。

現在は中学・高校を通して、有名私立大学への現役合格を目指す「進学コース」、国公立や難関私立大学への現役入学を目標とする「特進コース」、海外帰国子女や留学生のほかに英語の素養を持った子どもを対象として、難関私立大学の国際関係学部、国際経済学部、外国語学部などを指す「インターナショナルコース」の三つのコースを設定しています。

	月	火	水	木	金	土
1	国語 甲	国語 甲	数学	総合学習	社会	社会
2	国語 乙	社会	国語 甲	英語 a	英語 a	英語 a
3	美術	宗教	理科I	数学演習	技術家庭	国語 甲
4	数学	英語 a	体育	理科I	数学	数学
5	社会	国語 乙	英語 a	体育	音楽	理科II
6	数学演習	数学	総合学習	家庭科	体育	
7	英語 a	理科II	LHR	数学	数学演習	

特進コースの中学1年生の時間割の例。1週間の授業時間数は40時間です。進学コース、インターナショナルコースも同様です。

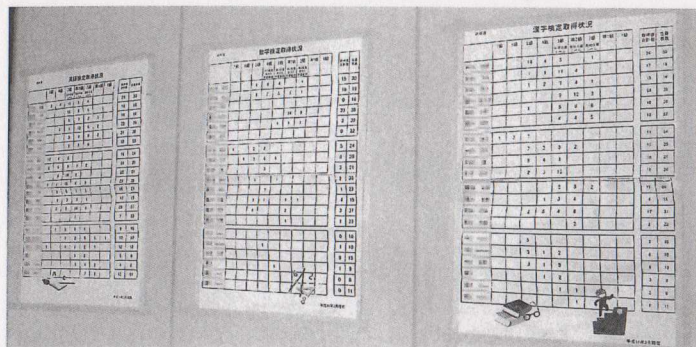


インターナショナルコースは、基本的にほぼすべての授業が英語で行われます。



外はもう真っ暗ですが、寮生は夜間学習にはげんでいます。意欲を示す子ども、より丁寧な指導が必要な子ども、それぞれに、先生方もとことん付き合います。





英語検定、漢字検定、数学検定の受験を実施して向学の気運を高めています。廊下にそれぞれの成果を掲示し、お互いの到達度を確認し合えるようにしています。

#### ■英語

東大英語 一流国立大学の記述問題対策

早大英語 英文の構造と論理展開の把握、過去問を含め解法理論の修得

慶大英語 出題形式別の特徴分析、各学部別に実践的解法にスポット

基礎英語 やさしい文の構造の把握、基礎を徹底しながら解法研究へ

#### ■数学

最高峰への理系数学 東大・京大・早稲田・慶応・東京理科大志望者対象

天空への数学IA IIB 基本定型問題と、その繰り返しによるレベル向上

数学総合完成IA IIB 入試の標準レベルの問題をしっかりと解くために

基礎からの数学IA IIB 一度やった人でも不安な人が対象

#### ■国語

基礎古文 ゼロからスタートして夏までに基礎をある程度完成させ、応用へ

古文攻略法 文法力をしっかりとつけ、さらに読解力の充実を

地理的に、予備校に通うのは困難…？ 大丈夫です。大手予備校が通信衛星を使って授業の中継を行う「代ゼミサテライン」の受講が可能です。

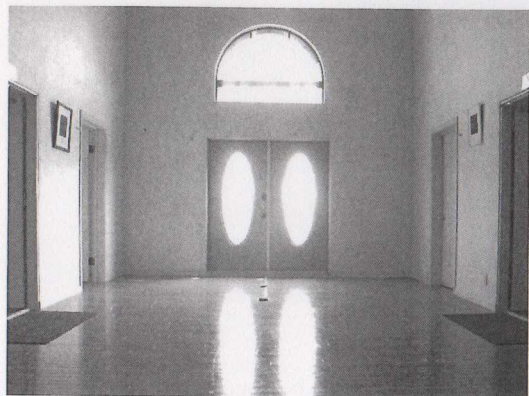
中学ではいずれのコースも一週間の授業時間数は四十時間と、一般の学校を上回る時間数の授業を実施しています。一限目のスタートが七時三十分と早いうえ、土曜日は祝祭日であっても五限の授業を行います（余談になりますが、男子のみの全寮制としてスタートした当初は一限目が六時三十分に始まり、その後、朝食をはさんで二限目から五限目までを午前中に行っていました）。

授業時間数は公立中学の約二倍あり、基礎をしっかりと固めたうえで、中学三年生の授業では一般の特進コースでは勉強合宿なども実施して進度を速めているため、中学三年生の授業では一般の高校二年生用の教材を使っている、早い時期から大学受験のための勉強にウェイトを傾けることができますようになります。

またインターナショナルコースでは、英語の授業を公立中学の約三倍にあたる週九時間行い、学年に関係なく、到達しているレベルごとに分かれて授業を行う一方、国語の授業については日本人の先生が担当し、進学コースや特進コースと同様に現代文、古文、漢文をしっかりと勉強する体制をとっています。

ぜひぶん勉強をさせる学校だな、と思われるかもしれませんが、子どもたちの到達度や目標に合わせた指導を意識しています。一律に負荷をかけているのではなく、伸びる子どもにはどんどんその機会を与え、不得意科目のある子どもには補習的な時間を設けて対応しています。寮生には夜間





どこかのペンションのようですが、「レジナ・ムンディ」と呼ばれる、中学・高校の女子寮です。寮では、男子・女子とも高校1年生までは四人部屋ですが、2年生には二人部屋、そして3年生には個室を用意して、受験勉強に集中するための環境整備を図っています。

学習の時間を設け、自習とするばかりではなく必要に応じて先生がつく形をとっているのも、そうした考え方によっているのです。

高校に入ると、子どもたちの到達度の幅もさらに広がってくるため、この考え方をさらに拡張して、授業の充実を図っています。つまり、必修科目の授業を一限目から午後の早い時間までに置き、そのあとの時間に課外授業として能力別・科目別の選択講座を多数設置しているのです。これらは暁星国際学園の先生方に加えて、大学受験で高い実績を持つ予備校の講師の方にも来ていただき、夜八時三十分まで、一コマ百分の授業を行っています。

さらに、暁星国際学園には、親御さんが開業医であったり勤務医であったりするために、あるいは親御さんや本人の希望もあって、将来、医師になることを目指している子どももいます。そこで、高校では彼ら医学部志望者向けとして、土日にやはり予備校の先生に来ていただいて、物理、数学、英語の特別授業を開いています。これは「ドニスタ」と呼ばれていて無学年制で、学年を超えて同じ教室で受講し、参加は希望者のみの自由です（「ドニスタ」とは、宗教や哲学の用語のように聞こえますが、「土曜・日曜・スタデー」の略です）。